

六時課の変更部分

【 第六時課 預言のトロパリ 第6調 】

誦経) <sup>しゅさい われらなんぢ じゅうじか ふくはい なんぢ せい ふくかつ さんえい</sup>  
主宰よ、我等爾の十字架に伏拜し、爾の聖なる復活を讚榮す。

【 提綱 第77聖詠 】

司祭) <sup>つつし き</sup>  
謹みて聽くべし。

誦経) <sup>プロキメン だいろく しらべ じれん かみ われら つみ ゆる</sup>  
提綱、第六の調、慈憐なる神は我等の罪を赦さん。



じれんなるかみはわれらのつみをゆるさん  
慈憐神我等罪赦

誦経) <sup>わ たみ わ ほう き</sup>  
我が民よ、我が法を聽け。



じれんなるかみはわれらのつみをゆるさん  
慈憐神我等罪赦

誦経) <sup>じれん かみ</sup>  
慈憐なる神は、



われらのつみをゆるさん。  
我等罪赦

【 イサイヤの預言書 29章13—23節 】

司祭) <sup>えいち</sup>  
睿智、

誦経) <sup>よげんしょ よみ</sup>  
イサイヤの預言書の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup>  
謹みて聽くべし。

誦経) <sup>しゆか ごとい こたみ くち われ ちか くちびる われ うやま そのこころ</sup>  
主是くの如く言う、斯の民は口にて我に近づき、唇にて我を敬えども、其心は

<sup>とお われ はな かれら ひと いましめ おしえ な おし いたづら われ とうと ゆえ み</sup>  
遠く我に離る、彼等は人の誠を教と爲して、教えて、徒に我を尊む。故に視

<sup>われまたひじょう こと もつ こたみ ま ひじょう きみょう こと そのちしや ち</sup>  
よ、我復非常の事を以て斯の民を待たん、非常にして奇妙なる事なり、其智者の智

<sup>ほろ そのぼうりやくしゃ ぼうりやく う わざわい かなかれ ふか ひそ そのさく しゆ</sup>  
は亡び、其謀畧者の謀畧は失せん。禍なる哉彼の深きに潜みて、其策を主に

<sup>かく ほつ そのわざ くらやみ おこな たれ われら み たれ われら し いもの</sup>  
隠さんと欲し、其事を幽暗に行いて、誰か我等を見ん、誰か我等を識らんと謂う者。

<sup>なん むち すえものづくり み つちくれ ごとおも つく もの おのれ つく</sup>  
何ぞ無知なる。陶人を視て、土塊の如く意うべけんや、造られし物は己を造りし

もの さ かれわれ つく あら い え かたち うつわ おのれ かたち  
者を指して、彼我を造りしに非ずと云うを得んや、形づくられたる器は己を形づく

もの さ かれちしき い え なおしばら へん その な その  
りし者を指して、彼知識なしと云うを得んや。尚頃くして、リバンは變じて園と爲り、園

はやし ごと み とききた そのひみみしい しょ ことば き めしい め くらみ  
は林の如く視らるる時來らざらんや。當日聾者は書の言を聞き、盲者の目は瞑より

やみ み え くる もの しゆ ため ますますよろこ まづ ひと せいしゃ ため  
暗より見るを得ん、苦しむ者は主の爲に益喜び、貧しき人はイズライリの聖者の爲

たのし けだしきょうぼうしゃ た ぶまんしゃ う ふぎ たくま ことば もつ ひと  
に樂まん。蓋強暴者は絶え、侮慢者は失せ、不義を逞しくして、言を以て人を

あみ もん あ さばき うなが もの わな もう ただ ひと しりぞ もの ことごと ほろ  
苦し、門に在りて鞫を促す者に機檻を設け、正しき人を退くる者は盡く滅びん。

ゆえ あがな しゆ いえ こと つ か ごと い そのとき  
故にアヴラアムを贖いし主はイアコフの家の事に就きて是くの如く言う、其時イアコフ

はぢ ひら そのおもて いろ うしな けだしかれ おのれ しょし わ て しわざ おのれ  
は羞を啓かず、其面は色を失わざらん。蓋彼は己の諸子、我が手の造工を己の

うち み とき かれら われ な せい せい もの せい かみ おそ  
中に見ん時、彼等は我の名を聖とし、イアコフの聖なる者を聖とし、イズライリの神を畏  
れん。

九時課の変更部分

【 コンダク 】「甘んじて十字架に擧げられし…」に代えて

【 十字架叩拜のコンダク 第7調 】

ほ の お の つ る ぎ は す で に エ デ ム の も ん を ま も ら  
焔 劍 既 門 守

ず 、 け だ し こ れ を し り ぞ く る し え い な る じ ゅ  
蓋 之 卻 至 榮 十

う じ か の き は い た れ り 、 し の は り お よ び  
字 架 木 至 死 刺 及

ぢ ご く の か ち は ほ ろ び た り 、 け だ し な ん  
地 獄 勝 亡 蓋 爾

ぢ は 、 わ が き ゅ う せ い し ゅ よ 、 あ ら わ れ て  
吾 救 世 主 現

ぢ ご く に あ る も の に よ べ り 、 ま た ら く  
地 獄 在 者 呼 復 樂

え ん に い れ 。

園 入

※九時課の畢り（エフレム祝文の後）に十字架の伏拜

【 讃詞 第2調 】

しんじゃよ、きたりて、いのちをほどこすき  
信者 來 生命 施 木

にふくは いせ ん。むかしてきはいつらく  
伏 拜 昔 敵 逸 樂

をえばにしてわれらよりふくをうばい、  
餌 我 等 福 奪

われらをかみよりとおざけられしものとな爲  
我 等 神 遠 者 爲

せ り、いまハストこうえいのおうはあ  
今 光 榮 王 甘

まんじてそのうえにてをのべて、われらを  
其 上 手 舒 て、我 等

はじめのふくにあげたまえり。しんじゃよ、  
初 福 擧 給 信者

きたりて、せいなるきにふくは い  
來 聖 木 伏 拜

せん。われらは、これをもってみえざるて敵  
我 等 は、此 以 見 敵

きのかしらをくだくにたうるものとな爲  
首 堪 者 爲

り。しよぞくしよみんよ、きたりて、うた  
諸 族 諸 民 來 歌

をもってしゆのじゅうじかをと うと ま ん。おち  
 以 主 十 字 架 尊 うと ま ん。お 墜  
 たるアダムのもったきすくいなるじゅうじかよ、  
 全 救 十 字 架 よ、  
 よろこ べ、けんせいなるしよおうはなんぢ  
 慶 虔 誠 諸 王 爾  
 をもってほこりとなす、なんぢのちからによ  
 以 爲 爾 力 因  
 りていみんをせいふくすればな り。わ  
 異 民 制 服 我  
 れらハスティアンはいまおそれをもってなんぢにせつ  
 等 今 畏 以 爾 接  
 ぶんして、なんぢのうえにていせられしかみ  
 吻 爾 上 釘 神  
 をさんえいしてい う、そのうえにてい  
 讚 榮 日 其 上 釘  
 せられししゆよ、われらをあわれみたま  
 主 我 等 憐 給  
 え、なんぢはじんじにしてひとをあ  
 爾 仁 慈 人 愛  
 するしゆなればな り。

【 讚詞 第8調 】

こんにちぞうぶつのしゅさい、こうえいのしゅはじゅ  
 今日 造物 主宰 光 榮 主 十  
 うじかにていせられ、わきをささ  
 字 架 釘 脇 刺  
 る。きょうかいかんみたるものはいとす  
 教 會 甘 味 者 胆 醜  
 とをなむ、くもをもっててんをおおうも  
 嘗 雲 以 天 覆 者  
 のはいばらのかんむりをこおむらせら  
 棘 冠 冠  
 あれ、はづかしめのころもをきせら  
 侮 辱 衣 衣  
 る。てをもってひとをつくりしものはく  
 手 以 人 造 者 朽  
 つべきてにてうたゐる、くもをもっててんに  
 手 批 雲 以 天  
 きするものはほほをうたれ、つばき  
 服 者 頬 批 唾  
 およびきず、はづかしめおよびむちうちを  
 及 傷 辱 及 笞 杖 打 傷  
 う受く。われのしょくざいしゅならびに  
 受 我 贖 罪 主  
 か神みは、じれんなるによりて、われ  
 神 慈 憐 因 我

て い ぎ い せ ら れ し も の の た め に い っ さ い を し  
定 罪 者 の た 爲 一 切 い を し 忍

の ぶ 、 せ か い を ま よ い よ り す く わ ん  
世 界 迷 惑 救

た め な り 。  
爲

こ う え い は ち ち と こ 子 と せ い し ん に き  
光 榮 父 子 聖 神 歸

す 、

こ ん に ち せ い の さ わ ら れ ん も の は わ れ に さ わ  
今 日 性 捫 者 我 捫

ら る 、 わ れ を く な ん よ り と く も の は く な ん  
我 苦 難 解 者 苦 難

を う く 。 め し い に ひ か り を た ま う も 者  
受 瞽 光 賜

の は ふ ほ う の く ち よ り つ ば き せ ら  
不 法 口 唾

れ 、 と り こ に せ ら れ し も の の た め に  
虜 者 爲

そ の か た を む ち う ち に あ た う 。  
其 肩 答 予

し じ ょ う な る ど う て い ぢ ゃ は は は か れ を じ ょ う じ か  
至 淨 童 貞 女 母 彼 十 字 架

にみ見て、いたくかなしみていえ  
 見、痛哀日  
 り、ああわがこよ、なんぞこれをな  
 噫、喜吾子何之為  
 したる、しゅうじんよりうるわしきものは  
 衆人より美者  
 いきなく、みばえなく、うるわしき  
 氣息華榮美  
 かたちなきものとおあらわ。る。  
 容者現  
 ああわがひかりよ、われなんぢのいぬる  
 噫、喜吾光りよ、我爾寢  
 をみるにしのびず、こころはさかれ。  
 見忍  
 ときつるぎはわがたましいをつらぬ  
 利劍我靈貫  
 く。われなんぢのくるしみをとうとみうた  
 我爾苦尊歌  
 い、なんぢのじれんにふくはいす、ごう  
 爾慈憐伏拜恒  
 にんのしゅよ、こうえいはなんぢにきす。  
 忍主光榮爾に歸す。  
 いまもいつもよよに、アミン。  
 今も何時よよに、アミン。

こんにちよげんしゃのこ と ば は かな え り 、 け 蓋  
 今日 預 言 者 言 ば 應

だ し み よ 、 わ れ ら は なん ぢ し ゅ の あ し の た 立  
 視 我 等 爾 主 足 立

ち し と こ ろ に ふ く は い す 、 ひ と り ひ 人  
 處 伏 拜 獨 人

と を あ い す る し ゅ よ 、 わ れ ら は す く い の  
 愛 主 我 等 救

き を う け て 、 ざ い あ く の く る し み  
 木 受 罪 惡 苦

よ り と か れ た り 、 し ょ う し ん ぢ よ の き と  
 釋 生 神 女 祈

う に よ り て な り 。  
 因

※司祭が十字架を至聖所に戻し、王門前に戻ったら誦經「至聖なる三者、一性の權柄、、、」へ

【 第140聖詠 第7調 】



しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給  
主 爾 呼 速 我 格 給

まえ、しゅよわれにききたまえ、  
主 我 聴 給

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給  
主 爾 呼 速 我 格 給

まえ、なんぢによぶときわがいのりのこえをいれたまえ、  
主 我 聴 給

え、ねがわくはわがいのりはこうろ爐のかおりのごとく、  
なんぢがかんばせのまえにのぼり、わがてをあぐるはくれのまつ祭りのごとく  
いれられん。しゅよわれにききたまえ。  
主 我 聴 給

まえ。

誦經) しゅわくちまもりおわくちびるもんふせたまわこころよこしまことばかたぶ  
主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に邪なる言に傾  
きて、不法を行ふ人と共に、罪の推諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の甘味を嘗め

ぎじん われ ばつ こ きょうじゅつ われ せ こ い うるわ あぶら わ  
 ざらん。義人は我を罰すべし、是れ矜 恤 なり、我を譴むべし、是れ極と 美 しき 膏、我  
 こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき かれら しゅちよう いわお  
 が 首 を悩ます能わざる者なり、唯我が 禱 は彼等の 惡事に敵す。彼等の 首 長 は巖石  
 あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き くだ わ ほね ぢごく  
 の 間 に散じ、我が 言 の 柔 和なるを聴く。我等を土の如く 斫り碎き、我が 骨 は地獄の  
 くち ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ たの わ たましい しりぞ  
 口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は 爾 を仰ぎ、我 爾 を恃む、我が 靈 を 退く  
 なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも たま ふけんしゃ おのれ あみ  
 る母れ。我が爲に設けられし 罟、不法 者の網より我を護り給え。不虔者は 己 の網に  
 かか ただわれ す え  
 罹り、唯 我は過ぐるを得ん。

【 第141聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい  
 我が聲を以て主に呼び、我が聲を以て主に禱り、我が 禱 を其前に注ぎ、我が 憂 を  
 そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち おい  
 其前に 顯 せり。我が 靈 の衷に弱りし時、爾 は我の途を知れり、我が行く路に於て、  
 かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと もの われ  
 彼等は 竊 に我が爲に網を設けたり。我 右に目を注ぐに、一人も我を認むる者なし、我  
 のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ い なんぢ われ  
 に遁るる 所 なく、我が 靈 を 顧 る者なし。主よ、我 爾 に呼びて云えり、爾 は我の  
 かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま われはなはだよわ  
 避 所なり、生ける者の地に於いて我の分なり。我が呼ぶを聴き給え、我 甚 弱りたれば  
 なり、我を迫 害する者より救い給え、彼等は我より強ければなり。

しゅ も なんぢふほう ただ しゅ だれ よ た しか なんぢ ゆるし ひと なんぢ  
 ⑥主よ、若し 爾 不法を糺さば、主よ、孰か能く立たん。然れども 爾 に 赦 あり、人の 爾  
 まえ つつし ため  
 の前に 敬 まん爲なり。

われ わ たましい とうと しよよく ふく かちく ごと め あ  
 ハリストスよ、我は吾が 靈 の 尊 きを諸 愆に服せしめて、家畜の如くになれり。目を擧  
 なんぢしじょうしゃ あお え しも ふ ぜいり ごと いの なんぢ よ かみ われ  
 げて 爾 至 上 者を仰ぐを得ずして、下に俯し、税吏の如く祈りて 爾 に呼ぶ、神よ、我を  
 きよ われ すく たま  
 潔め我を救い給え。

われしゅ のぞ わ たましいしゅ のぞ われかれ ことば たの  
 ⑤我主を望み、我が 靈 主を望み、我彼の 言 を恃む。

われ わ たましい とうと しよよく ふく かちく ごと め あ  
 ハリストスよ、我は吾が 靈 の 尊 きを諸 愆に服せしめて、家畜の如くになれり。目を擧  
 なんぢしじょうしゃ あお え しも ふ ぜいり ごと いの なんぢ よ かみ われ  
 げて 爾 至 上 者を仰ぐを得ずして、下に俯し、税吏の如く祈りて 爾 に呼ぶ、神よ、我を  
 きよ われ すく たま  
 潔め我を救い給え。

わ たましいしゅ ま ばんにん あさ ま ばんにん あさ ま はなはだ  
 ④我が 靈 主を待つこと、番 人の旦を待ち、番 人の旦を待つより 甚 し。

ちめいしゃ むしん くらやみ お しゅうじん しんち ひかり しめ たま  
 致命者は無神の幽 暗を逐いて、衆 人に神智の 光 を示し給えり。

③ <sup>ねが</sup>願わくは<sup>しゅ たの</sup>イスライリは<sup>けだしあわれみ しゅ</sup>主を<sup>おおい</sup>恃まん、<sup>あがない かれ</sup>蓋 憐 は<sup>かれ</sup>主にあり、<sup>かれ</sup>大なる<sup>あがな</sup>贖 も<sup>ふほう</sup>彼にあり、<sup>そのことごと</sup>彼は<sup>あがな</sup>イスライリを<sup>あがな</sup>其 悉 くの<sup>あがな</sup>不法より<sup>あがな</sup>贖 わん。

<sup>いた えいち</sup>至りて<sup>しよぼくし</sup>睿智なる<sup>なんぢら</sup>諸<sup>じゆんせい</sup>牧師よ、<sup>おしえ しんせい</sup>爾 等は<sup>ひかり</sup>醇 正の<sup>もつ しゅ</sup>教の<sup>きようかい</sup>神聖なる<sup>あがな</sup>光を<sup>あがな</sup>以て<sup>あがな</sup>主の<sup>あがな</sup>教會

<sup>てら たま</sup>を<sup>あがな</sup>照し<sup>あがな</sup>給えり。

② <sup>ばんみん</sup>萬 民よ、<sup>しゅ ほ</sup>主を<sup>あが</sup>讃め<sup>あが</sup>揚げよ、<sup>ばんぞく</sup>萬 族よ、<sup>かれ</sup>彼を<sup>あが</sup>崇め<sup>あが</sup>讃めよ、

<sup>こくしょう</sup>克 肖 なる<sup>しよしんぶ</sup>諸 神父よ、<sup>なんぢら</sup>爾 等は<sup>つね とお</sup>常に<sup>の お</sup>過られ<sup>あくき</sup>ぬ<sup>あみ</sup>野に<sup>やぶ たま</sup>居りて、<sup>あがな</sup>惡鬼の<sup>あがな</sup>網を<sup>あがな</sup>破り<sup>あがな</sup>給えり。

① <sup>けだしかれ</sup>蓋 彼が<sup>われら</sup>我等に<sup>ほどこ</sup>施す<sup>あわれみ</sup> 憐 は<sup>おおい</sup>大 なり、<sup>しゅ しんじつ</sup>主の<sup>なが</sup>眞 實は<sup>そん</sup>永 く<sup>あがな</sup>存す。

<sup>きゆうせいしゅ</sup>救 世 主よ、<sup>ぜんせかい</sup>全世界を<sup>しんぱん</sup>審 判せん<sup>ため</sup>爲に<sup>きた</sup>來る<sup>とき</sup>時、<sup>われは</sup>我 恥づ<sup>わざ</sup>べき<sup>おこな</sup>行爲を<sup>もの</sup>行 い<sup>はづ</sup>し者<sup>あがな</sup>を<sup>あがな</sup>辱かし

<sup>なか</sup>むる<sup>あがな</sup>勿れ。

<sup>こうえい</sup>光 榮は<sup>ちち</sup>父と<sup>こ</sup>子と<sup>せいしん</sup>聖 神に<sup>き</sup>歸す、

<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>なんぢ</sup>爾 は<sup>はじめ</sup>始 に<sup>ひと</sup>人<sup>なんぢ</sup>を<sup>ぞう</sup>爾 の<sup>しょう</sup>像と<sup>よ</sup>肖 とに<sup>つく</sup>因りて<sup>これ</sup>造り、<sup>らくえん</sup>之を<sup>た</sup>樂 園に<sup>なんぢ</sup>立てて<sup>しよ</sup>爾 の<sup>しよ</sup>諸

<sup>ぞうぶつ</sup>造 物を<sup>おさ</sup>治め<sup>しか</sup>しめたり。<sup>かれ</sup>然れども<sup>あくま</sup>彼は<sup>ねたみ</sup>惡 魔の<sup>いざな</sup>妬 に<sup>しよく</sup>誘 われて<sup>な</sup>食 を<sup>なんぢ</sup>嘗め、<sup>いましめ</sup>爾 の<sup>あがな</sup>誠 を

<sup>おか</sup>干す<sup>もの</sup>者と<sup>な</sup>爲れり。<sup>ゆえ</sup>故に<sup>しゅ</sup>主よ、<sup>なんぢ</sup>爾 は<sup>かれ</sup>彼が<sup>またそのい</sup>復 其<sup>ち</sup>出で<sup>かえ</sup>し<sup>あんそく</sup>地<sup>なんぢ</sup>に<sup>もと</sup>返りて、<sup>あがな</sup>安 息を<sup>あがな</sup>爾 に<sup>あがな</sup>求めん<sup>あがな</sup>こ

<sup>さだ たま</sup>とを<sup>あがな</sup>定め<sup>あがな</sup>給えり。

【 生神女讃詞 第7調 】

いまもいつもよよに、アミン。  
今 何時 世世

しょうしんぢよよ、なんぢはせいにてははとし  
生 神 女 爾 性 超 母 識

られ、ことばとちしきとにてははとし  
言 智 識 踰 童 貞

いぢよにとどまれり、したはなんぢのさんのき  
女 止 舌 爾 の 産 奇



せきをいうあたわす。けだしいさぎよき  
跡言能蓋潔

ものよ、なんぢのはらみはしえいにして、  
者爾降孕至榮

さんのさまはさとりがたし、かみのほつする  
産状悟難神欲

ところにはてんせいこのほうかたるればなり。  
所天性法勝

ゆえにわれらみななんぢをかみのはは  
故我等皆爾神母

としりて、せつになんぢにもとむ、われら等  
識切爾求我等

のたましいのすくわれんことをいのりた給  
靈しいの救を禱り給

まえ。

【 聖入 】

司祭) えいち つし た  
睿智、肅みて立て、

【 聖ソフロニイの祝文 】



せいにしてふくたるじょうせいなるてんのちちの  
聖福常生天父

せいなるこうえいのおだやかなるひかりイイ  
聖光榮お穩かなるひ光

ス ハリスト スよ 、 わ れ ら ひ の い り に い た り く  
我 等 日 入 至 暮

れ の ひ か り を み て 、 か み ち ち と こ と せ い し ん  
光 見 神 父 子 聖 神

を う た う 。 い の ち を た も う か み の こ 子  
歌 生 命 賜 神 子

よ 、 な ん ぢ は い つ も け い け ん の こ え に て う た わ  
爾 何 時 敬 虔 聲 歌

る べ し 、 ゆ え に せ か い は な ん ぢ を あ が め  
故 世 界 爾 崇

ほ む 。  
讚

【 第一の提綱 】

司祭) <sup>つつし</sup>謹 <sup>き</sup>みて聴くべし、<sup>しゅうじん</sup>衆 <sup>へいあん</sup>人に平安、<sup>えいち</sup>睿智、<sup>つつし</sup>謹 <sup>き</sup>みて聴くべし。

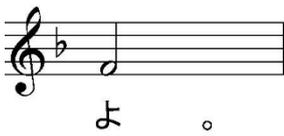
誦經) プロキメン、<sup>だいし</sup>第四の <sup>しらべ</sup>調、<sup>ぼくしゃ</sup>イスライリの <sup>みみ</sup>牧者よ、<sup>かたが</sup>耳を傾けよ。

イスライリの <sup>ぼくしゃ</sup>牧者よ、<sup>みみ</sup>みみを <sup>かたが</sup>かたがけ  
耳 傾

よ。

誦經) イオシフを <sup>ひつじ</sup>羊の <sup>ごと</sup>如く <sup>みちび</sup>導く者、<sup>ざ</sup>ヘルヴィムに <sup>もの</sup>坐する者よ、<sup>おのれ</sup>己を <sup>あらわ</sup>顯せ。

イスライリの <sup>ぼくしゃ</sup>牧者よ、<sup>みみ</sup>みみを <sup>かたが</sup>かたがけ  
耳 傾



よ。

誦經) イズライリの<sup>ほくしゃ</sup>牧者よ、



みみをかたぶけよ。  
耳 傾

司祭) <sup>えいち</sup>睿智、

誦經) <sup>そうせいき</sup> <sup>よみ</sup>創世記の讀、

司祭) <sup>つつし</sup> <sup>き</sup>謹みて聽くべし、

【 創世記 12章 1～7節 】

誦經) <sup>しゅ</sup>主はアヴラムに謂えり、<sup>い</sup>爾の地より、<sup>なんぢ</sup> <sup>ち</sup>爾の親族より、<sup>なんぢ</sup> <sup>しんぞく</sup>爾の父の家より出でて、<sup>わ</sup>我が  
<sup>なんぢ</sup> <sup>しめ</sup>爾に示さんとする地に往け、<sup>ち</sup> <sup>ゆ</sup>我爾より大なる民を出し、<sup>われなんぢ</sup> <sup>おお</sup> <sup>い</sup> <sup>たみ</sup> <sup>い</sup> <sup>だ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>しゅく</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>な</sup> <sup>おお</sup> <sup>い</sup>  
にせん、<sup>なんぢ</sup> <sup>しゅくふく</sup> <sup>も</sup> <sup>い</sup> <sup>な</sup> <sup>われ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>しゅく</sup> <sup>もの</sup> <sup>しゅく</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>の</sup> <sup>ろ</sup> <sup>もの</sup>  
<sup>の</sup> <sup>ろ</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>よ</sup> <sup>ち</sup> <sup>ばんぞく</sup> <sup>しゅくふく</sup> <sup>え</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>かれ</sup> <sup>い</sup> <sup>ところ</sup> <sup>したが</sup>  
<sup>い</sup> <sup>だ</sup> <sup>たり</sup>、<sup>かれ</sup> <sup>とも</sup> <sup>ゆ</sup> <sup>アヴラム</sup>は<sup>ハ</sup> <sup>レ</sup> <sup>ラン</sup>の地を出でし時七十五歳なりき。<sup>ア</sup>  
<sup>そのつま</sup> <sup>そのあに</sup> <sup>こ</sup> <sup>およ</sup> <sup>そのあつ</sup> <sup>すべ</sup> <sup>もちもの</sup> <sup>え</sup>  
<sup>ひと</sup> <sup>びと</sup> <sup>たづさ</sup> <sup>い</sup> <sup>ち</sup> <sup>ゆ</sup> <sup>そのち</sup> <sup>たて</sup> <sup>へ</sup> <sup>ところ</sup>  
<sup>およ</sup> <sup>たか</sup> <sup>かし</sup> <sup>き</sup> <sup>いた</sup> <sup>そのとき</sup> <sup>ひと</sup> <sup>そのち</sup> <sup>す</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>あらわ</sup>  
<sup>い</sup> <sup>われ</sup> <sup>こ</sup> <sup>ち</sup> <sup>なんぢ</sup> <sup>すえ</sup> <sup>あた</sup> <sup>かし</sup> <sup>こ</sup> <sup>おい</sup> <sup>かれ</sup> <sup>あらわ</sup> <sup>しゅ</sup> <sup>ため</sup> <sup>さい</sup>  
<sup>だん</sup> <sup>きづ</sup>  
壇を築けり。

【 第二の提綱 <sup>プロキメン</sup> 】

司祭) <sup>つつし</sup> <sup>き</sup>謹みて聽くべし、

誦經) <sup>だいし</sup> <sup>しらべ</sup> <sup>よろこ</sup> <sup>かみ</sup> <sup>われら</sup> <sup>かため</sup> <sup>うた</sup>  
<sup>よろこ</sup> <sup>び</sup> <sup>て</sup> <sup>か</sup> <sup>み</sup> <sup>、</sup> <sup>われ</sup> <sup>ら</sup> <sup>の</sup> <sup>か</sup> <sup>た</sup> <sup>め</sup> <sup>に</sup> <sup>う</sup>  
<sup>歡</sup> <sup>神</sup> <sup>我</sup> <sup>等</sup> <sup>防</sup> <sup>固</sup> <sup>歌</sup>



よ ろ こ び て か み 、 わ れ ら の か た め に う  
歡 神 我 等 防 固 歌



た え 。

誦經) <sup>うた と つづみ かきん しつ あた</sup> 歌を執り、鼓と佳琴と瑟とを與えよ、



よ ろ こ び て か み 、 わ れ ら の か た め に う  
歡 神 我 等 防 固 歌



た え 。

誦經) <sup>よろこ かみ</sup> 歡びて神、



わ れ ら の か た め に う た え 。  
我 等 防 固 歌

【 祝福 】

司祭) <sup>えいち つつし た ひかり しゅうじん てら</sup> 睿智、肅みて立て、ハリストスの光は衆人を照らす。

誦經) <sup>しんげん よみ</sup> 箴言の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

【 箴言 14章15節～26節 】

誦經) <sup>つたな もの およそ ことば しん さと もの おのれ みち つつし ちしゃ おそ あく はな</sup> 拙き者は凡の言を信じ、達き者は己の途を慎む。智者は懼れて惡を離れ、

<sup>ぐしゃ おのれ たの ふほうしゃ まじわ いか やす もの おろか おこな う ただはか</sup> 愚者は己を恃みて不法者と交る。怒り易き者は愚なることを行うを得、惟謀り

<sup>あく おこな ひと にく つたな もの むち しぎょう な さと もの ちしき かんむり な</sup> て惡を行ふ人は惡まる。拙き者は無知を嗣業と爲し、達き者は知識を冕と爲す。

<sup>あくしゃ ぜんにん まえ ふふく ざいしゃ ぎじん もん ふふく まづ もの そのとなり にく</sup> 惡者は善人の前に俯伏し、罪者は義人の門に俯伏せん。貧しき者は其隣にも惡ま

<sup>と もの しんゆうおお そのとなり あなど もの つみ まづ もの あわれ ひと さいわい</sup> る、富める者には親友多し。其隣を藐る者は罪あり、貧しき者を憐む人は福

<sup>あく はか もの まよ あら あく おこな もの じれん しんじつ し ただぜん</sup> なり。惡を謀る者は迷えるに非ずや、惡を行ふ者は慈憐と眞實とを知らず、唯善を

<sup>はか もの じれん しんじつ およそ ろう えき ただたごん そん ちしゃ とみ</sup> 謀る者には慈憐と眞實あり。凡の勞には益あり、唯多言には損あるのみ。智者の富

<sup>そのかんむり ぐしゃ どせい わざわい ただ しゅうしゃ ひと いのち すく ただ</sup> は其冕なり、愚者の度生は禍なり。正しき證者は人の生命を救い、正しからざ

もの いつわり は 吐く。主を畏るる寅畏には堅き依頼あり、彼は其諸子の爲に避所なり。

※ 願わくは我が禱は、、、へ